

## 通学合宿に参加した補助学生の学びにおける一考察

### A Study in learning auxiliary student who participated in the “Tuu-gaku Gasshuku”

小 野 恭 子\*

Kyoko ONO\*

#### 要 旨

通学合宿とは公共施設に寝泊りして共同生活を送りながら学校に通学する取り組みである。この通学合宿では、家庭科教育で必要となる子どもの生活実態を補助学生が把握することができる良い機会である。よって本研究では、3泊4日の通学合宿を通して考察された子どもの生活実態と通学合宿に補助学生として参加した教員養成大学の学生が子どもの生活実態から何を学び取ったのかについて考察を行った。

キーワード：小学校家庭科，通学合宿

#### 1. はじめに

小学校では、担任が全ての教科を受け持ち学習することが基本である。しかし音楽、家庭科、図画工作の授業においては教科専門の教師や非常勤講師が担っている場合もある。平成23年度の文部科学省の調査<sup>1)</sup>によれば、小学校の家庭科において、家庭科専科の教員が授業を行っている割合は、7～27.4%となっており、担任が家庭科の授業を持っている割合が7割以上を占める。

しかし、家庭科は5・6年生のみの教科であるために国語や算数といった教科よりも受け持つ機会は少なく、また家庭科の教科特有の知識・技能が必要とされるために、家庭科の授業を敬遠する教師もいる。一方で2004年に行われたベネッセ教育研究所の調査<sup>2)</sup>では、果物の皮を包丁でむいたことがある小学生は6割を切っているなど、現代の小学生の生活経験は乏しくなっていることが問題視されているが飛躍的な改善はなされていない。教員を目指している大学生も、生活経験が乏しいことが問題視されていた世代である。このことから、学生自身も小学校の家庭科の指導に必要な知識技能を身につけていないことが考えられる。小学校教員を目指している学生が家庭科の指導内容等について学ぶ大学の教育法の授業では、大教室・

大人数での講義が多く、知識の取得を主に行い技能の習得を講義に取り入れることが難しい。このことから、学生自身が日常生活において、家庭科で教える内容の基礎的技能的習得が不可欠であると考え。さらに家庭科を教えるためには、子どもの生活経験等を考慮して授業を作ることが必要である。そのため家庭環境や生活している地域の施設等によって、子ども達の生活経験も異なっているために、家庭科の授業を行うときには、子どもの生活実態を把握することが求められている。

#### 2. 通学合宿とその意義

通学合宿とは、1983年に福岡県庄内町で始まった取り組みであり、公民館などの公共施設に寝泊りして共同生活を送りながら、学校に通学する取り組みのことである。食事の用意や入浴、洗濯、掃除などの日常生活を公共施設で大人の手を借りながらも行い、日常の学校生活を送る。合宿の活動主体は教育委員会（社会教育課）が多くなっているが、保護者・地域スタッフ等が中心になって運営する場合もある。

1996年7月中央教育審議会台1次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方」<sup>3)</sup>では、「地域社会における教育の具体的な充実方策」の一つとして「活動

\*弘前大学教育学部家政教育講座

Department of Home Economics, Faculty of Education, Hirosaki University

の機会の充実」が挙げられた。さらにその例示では子ども達の人間関係の改善や自活力の向上を図るために「合宿通学」が挙げられ、合宿通学が注目されるようになった。

平成13年に国立教育政策研究所社会教育実践研究センターが行った「地域における通学合宿の実態に関する調査研究調査」では、通学合宿を実施している市区町村は231市町村、245事業であったが、平成18年の調査<sup>4)</sup>では265市町村、644事業と増えている。2つの調査から通学合宿では、自炊、風呂焚き、掃除、洗濯等が行われることが多く、それを支えるのは利用している公共施設の人、地域の人、ボランティアなどである<sup>5・6・7)</sup>。

これらの通学合宿では同年齢の子ども達が宿泊を共にし、生活することで、生活経験を行うだけではなく、子ども達同士の人間関係を育てることを狙いとしている。近年、学校現場でも子ども達の生活体験不足が問題視されている。特に少子化の影響をうけ、家庭でのお手伝い体験やそのため学校教育においても体験活動を取り入れた総合的な学習の時間を教育課程に取り入れている学校もある<sup>6)</sup>。

この通学合宿は子ども達が日常生活を自分たちで行う場であり、この通学合宿に補助スタッフとして活動する大学生にとっては、子どもたちの生活実態を理解し、学生自身が必要な知識・技能について認識することができる場であると考えた。

### 3, 研究の目的と方法

本研究ではある地域で行われた通学合宿において、小学校教員を目指す補助学生が、子どもの生活実態から、家庭科教育のどのような項目に注目し、指導する必要があると捕らえたのかを明らかにすることを目的にした。

調査方法は、2014年6月に通学合宿の補助を行った大学生8名を対象に、通学合宿に参加する前に、子ども達とかかわる上で必要とされる項目と、小学校家庭科の学習指導要領で挙げられている内容項目22項目についてアンケート調査を実施した。さらに、学生の意識変化を見取るために、毎晩行われた反省会における発言を記録したものから、どのような学びがあったのかを明らかにすることとした。

### 4, 調査対象である通学合宿の概要

調査対象とした通学合宿への参加児童は小学校4年生から6年生までの小学生20名、小学校4年生6名(男子2名、女子4名)小学校5年生3名(男子2名、女子1名)小学校6年生11名(男子6名、女子5名)で、2014年6月中の日曜日から木曜日までの3泊4日の日程で実施された。

1日間の流れは表1のとおりである。

表1 子ども達の生活の流れ

時間	主な活動内容
朝	起床 ラジオ体操 朝食作り・朝食・後片付け 登校
日中	日常の学校生活
午後	下校 学習(遊び)
夕方	買い物 夕食作り・夕食・後片付け
夜	入浴 振り返り ストレッチ体操 読書 就寝

一日の主な生活は、起床、ラジオ体操、朝食作り・朝食・後片付け、登校、下校、学習(遊び)、買い物、夕食作り・夕食・片付け、入浴、振り返り、ストレッチ、読書、就寝であった。しかし一日目は、午後から公民館に集合し、開校式・アイスブレイク・献立決め、隣接する図書館でのブックトークが行われた。また最終日である4日目は下校後に、レクリエーション・掃除・閉校式が行われ解散となった。

### 5, 調査対象学生

調査対象者は通学合宿が実施された町から約80キロ離れた場所にある教育養成大学の学生(2年生1名、3年6名、4年生1名)の計8名である。4年生の1名を除いて、教育実習の経験は無い。また1年生から授業の一環で小学校に参与観察に定期的に通っているが、子ども達の指導経験等はない。

## 6. アンケート調査からみる学生の意識

調査は子どもとかかわる上で必要とされるであろう6項目と小学校家庭科の学習指導要領<sup>8)</sup>にあげられるものの中から指導項目22項目に対して実施した。それぞれの項目に対し、とても必要、少し必要、あまり必要でない、必要でない、から選んでもらい、とても必要を4点、必要ないを1点、とし平均点を表した。

子どもの生活を指導する上で必要であると考えられる項目は、「相手の話を聞く」「時間の見通しを持つ」「集団を統率する」「大きな声で話す」「悪いことをきちんとしかる」「喧嘩や争いごとをなだめる」の6項目である。この項目は、前年度通学合宿に参加していた補助学生が反省会で述べていた項目を参考に選んだ。その結果は、図1のとおりとなった。

相手の話を聞く、時間の見通しを持つ、集団を統率する、の3項目では全ての学生がとても必要であると考えており、他の3項目についても平均が3点以上となっており必要であると考えていた。

また、小学校の家庭科における学習項目に対する質問項目と学習指導要領の対応は、以下の表2に示した。これについてもそれぞれの項目に対し、とても必要、少し必要、あまり必要でない、必要でない、から選んでもらい、とても必要を4点、必要ないを1点、とし平均点を表した。

結果は、図2のとおりとなった。物や金銭の計画的な使い方、生活時間の工夫の3項目が4点、身近なものの買い方、調理計画、他5項目を含めた7項目が3.9点、家庭の仕事と分担に対する知識、体に必要な栄養素の種類と働き、一食分の献立を立てるための知識の

表2 家庭科に関連する質問項目

領域	質問項目
A 「家庭生活と家族」	家庭の仕事と分担に対する知識
	生活時間の工夫
	家族との触れ合いや団欒に対する知識
	近隣の人々とかかわりに対する知識
B 「日常の食事と調理の基礎」	食事の役割と日常の食事の大切さ
	楽しく食事をするための工夫
	体に必要な栄養素の種類と働き
	食品の栄養的な特徴と組み合わせ
	一食分の献立をたてるための知識
	調理計画
	材料の洗い方、切り方に対する知識・技能
	味の付け方、盛り付け方に対する知識・技能
C 「快適な衣服と住まい」	配膳方法と片づけ方
	衣服の働きと快適な着方に対する知識・技能
	日常着の手入れとボタン付け
	洗濯の方法
	整理整頓の方法
	掃除の仕方と工夫
D 「身近な消費生活と環境」	季節の変化に合わせた生活の方法
	物や金銭の計画的な使い方
	身近な物の買い方
	環境に配慮した生活に対する知識・技能

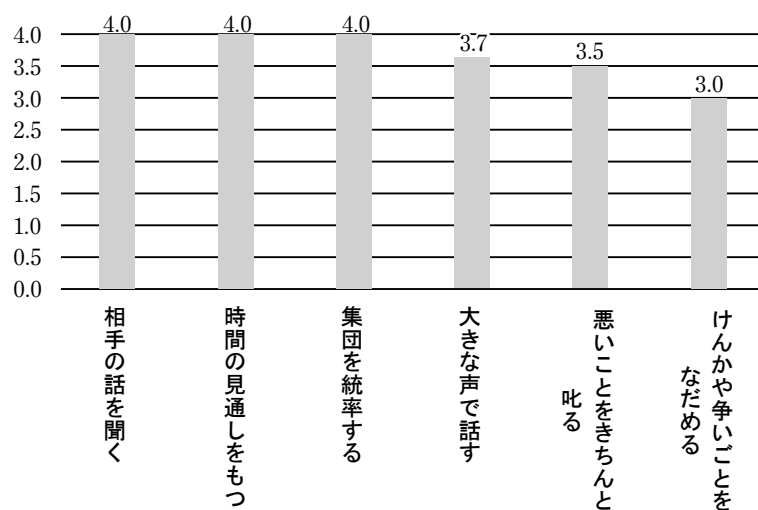


図1 子どもと接するために必要であると考えられる項目

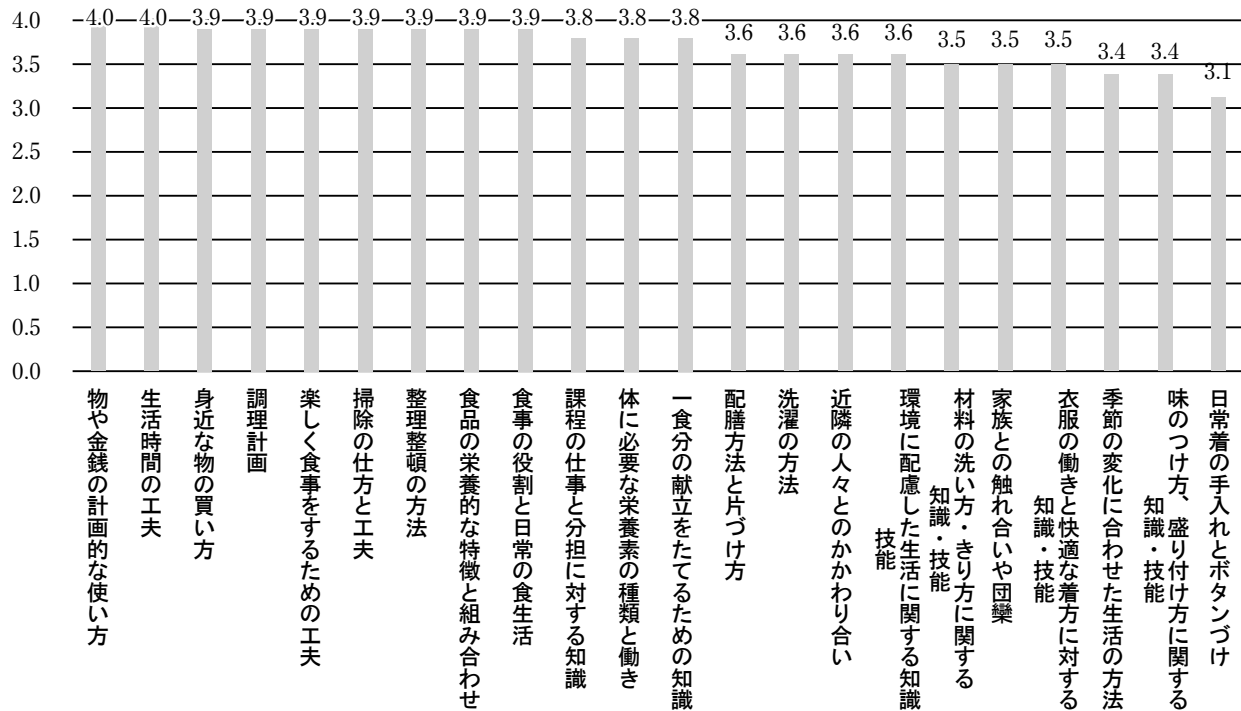


図2 家庭科に関する項目

3項目が3.8点、配膳方法と片付け方、選択の方法など4項目が3.6点、材料の洗い方・きり方に関する知識・技能他2項目が3.5点、季節の変化に合わせた生活の工夫他1項目が3.4点、もっとも低いもので日常着の手入れとボタン付けについてが3.1点となっていた。

これらの事前調査では、それぞれの質問項目に対する差があまり出なかった。しかし家庭科の項目で学生がとても必要であると考えた項目は、物や金銭の計画的な使い方と生活時間の工夫であり、もっとも必要ないと考えた項目は日常着の手入れとボタン付けであった。

事前に配布された今回調査対象とした通学合宿に対する日程表から、家庭科と関連しそうな項目として献立決め、食事の準備・後片付け、買い物・掃除が挙げられる。したがって、買い物場面から、金銭の計画的な使い方が重要であると考え、4日間の生活を補助することから生活時間の工夫が必要であると考えたと推測される。

服の手入れとボタン付けは、通学合宿の日程には洗濯が含まれておらず、子ども達が短期間の宿泊であるためにボタンが取れても不自由が無いと考えたからではないかと推測される。

## 7. プロトコルから見る学生の学び

学生が通学合宿を行ううえでどのようなことを学び

取ったのかについて、毎晩行った反省会での発言を記録したものから考察を行った。

### 1) 食事の支度に関する気づき

最も多かった反省項目は調理に関する項目についてであった。そのうちのいくつかをあげ、家庭科の学習内容との関連を探った。

#### エピソード1

献立を決めているときに、〇〇君は野菜が嫌いと言っていて、〇〇ちゃんは魚が嫌いと言っていて、みんながいいねといえるメニューを決めるのが難しかった。こちらが、これは？と献立のアイデアを言ってみても、なかなかみんなが納得してくれなかった。メインのおかずが決まっても、ほかに野菜は？とか聞いても、野菜はいいと言っていないと困った。①あとは、家で作ることがあるから大丈夫といって、時間がかかるメニューを言う子②もいて調整が難しかった。やっと献立が決まっても、今度は一人分どのくらいを買ったらよいかについて、自分も分からなかった③し、作り方もあいまい④だったので、どのようにアドバイスしていいかわからなかった。

エピソード1は、1日目の午後に行われた献立を立てる場面でのことである。各班に補助学生がつき、1回分の夕食の献立を決めた。献立を決めているときには、料理のレシピ、料理の作り方が載っている資料等はなく、5大栄養素の分類図と給食の献立が資料として掲示されていた。エピソード1からは、学生は4つのことに気づいていることが分かる。下線部①「ほかに野菜は?とか聞いても、野菜はいらないといって困った。」や下線部②「時間がかかるメニューを言う子」などの発言からは、献立を立てるための栄養バランスや調理時間について子ども達が考えていないことに気づいているといえる。しかし下線部③、④の「一人分どのくらいを買ったらよいかについて、自分も分からなかった」「作り方もあいまい」という発言から、調理時間や一人分の材料の量などについては、学生自身が知識を持っていないことに気づいたといえる。

### エピソード2

・調理の場面では、一番時間の見通しが必要で、包丁の使い方や火を使うので危険があり、一番サポートする側も特に気を使う⑤。

初日に比べて、2日目、3日目は調理のリズムもよくなりスムーズに進められるようになった。

・自分が調理の手順を知らない、子ども達に指示ができない⑥。子ども達がどのくらい時間がかかるのかわからない⑦から、時間の見通しをもてなかった⑧。

さらに、エピソード2である実際の調理場面では下線部⑤「一番サポートする側も特に気を使う」や、下線部⑦「子ども達がどのくらい時間がかかるのかわからない」といった発言からは、子ども達の調理技能のレベルや調理時間を理解していないことに気づいており、さらに下線部⑥「自分が調理の手順を知らない子ども達に指示ができない」からは、自分自身の調理に対する知識が少ないことを感じ取り、それらの要因が下線部⑧「時間の見通しをもてなかった」のように、活動全体に影響することに気づいているといえる。

## 2) 買い物場面での気づき

次に、買い物場面での気づきについて考察を行う。買い物は1日目から3日目まで毎日行っており、子ども達の中心的活動の1つであるといえる。

下線部⑨、⑩「予算に収まるか計算する」「計算してもらったら、予算オーバーしてしまった」から、子ども達も学生も予算を気にしながら買い物をしていた

### エピソード3

・夕飯の買い物をしていたときに、途中で電卓を持っていた子が、計算がわからなくなってしまって(中略)6年生の女子が、一つ一つの値段をメモしてから計算すればいいことを言ったら、メモをしながら、予算に収まるか計算する⑨ようになった。

・レジで計算してもらったら、予算オーバーしてしまった⑩。でもレジの係りの人が、「私の娘も通学合宿で失敗したことがあるとっていたから、大丈夫。どれを減らす?」とってくれたので、○さんがひとつ減らした。

子どもも、おばさんでよかったといっていて、地域の人に見守られていることがわかった⑪。

が、失敗することもあったことがわかる。失敗のときに、異学年同士で教えあいがあったこともエピソードから読み取れる。また、下線部⑪「地域の人に見守られていることが分かった」のような失敗場面で地域の人に声をかけてもらったことから地域の人々との関係性に目を向けられたといえる。通学合宿では基本的な活動を公共施設の中で行い、登下校と買い物の時に、地域に出かけていく。そのため買い物場面は子ども達が生活している地域の人々と触れ合う数少ない機会となり、地域の人々によって自分たちの活動が支えられていることに気づいたといえる。

## 3) 生活指導場面での気づき

生活指導場面での学生の気づきについてエピソード4から考察を行う。生活指導の場面は主に、起床・就寝準備のときのことが中心となっている。

荷物整理の場面に注目したエピソードであり、下線部⑫「整理には目を向けていなかった」のように、はじめは整理整頓を補助する意識が学生に無かったことがわかる。また、下線部⑬「子どもがもっとも多く発した言葉がこれ誰のですか?だった。(中略)おれのじゃない、そこにはなにもおいていないという回答が多かった。」からは、子ども達も自分のものを整理整頓できておらず、自分のものかどうか把握していない様子が伺える。

下線部⑭「自分の所有物を勝手に散らかすことは少なくなったが、荷物を整理するためのかごに適当に収納することは変わらず、そこで何かの手立てをすべきだったとおもった。」の部分からは、子ども達が自分

#### エピソード4

- ・一日目ばたばたしていたので、誰がどこに寝るのか決まっていなかった状況だったので、あまり整理には目を向けていなかった。<sup>⑫</sup>二日目は自分の荷物を整理する姿勢が見られるかに着目しながら観察した。荷物の整理の時間に子どもがもっとも多く発した言葉が「これ誰のですか」だった。(中略)「おれのじゃない」「そこにはなにもおいていない」という回答が多かった。<sup>⑬</sup>
- ・自分の所有物を勝手に散らかすことは少なくなったが、荷物を整理するためのかごに適当に収納することは変わらず、そこで何かの手立てをすべきだったとおもった。<sup>⑭</sup>
- ・トイレなどについてもスリッパをそろえるなどができていなくて<sup>⑮</sup>、公共施設を借りているという意識が少ない。

のスペースを私的空間として認識し、自分のものはその空間に納めようとしている様子が伺えるが、整理しようとするまでは意識できていないことが分かる。また補助学生も、何かの手立てをすべきと反省はしているが、その場ではどのような手立てをうったらよいのか、分かっていないといえる。

さらに下線部<sup>⑮</sup>「トイレなどについてもスリッパをそろえるなどができていなくて」からは、子ども達は公共施設で生活をしているが、自分たち以外の人も利用する場所であるという意識が少ないことに、学生が気づいていたといえる。

## 7. 考察

通学合宿に参加する前のアンケート結果からは、学生は生活に関連する指導項目や家庭科の指導項目は全て大切であると考えていた。

成果としては、3点挙げられる。1点目は、調理に関する知識や技能が不足していることに気づいた点である。反省会での発言からは、特に調理に関する場面での学びが多かった。小学校学習指導要領では、B「日常の食事と調理の基礎」で指導する内容から、特に学生にとって知識や技能が不足していると考えた項目は「一食分の献立を考える」「調理計画を立てる」に関することであった。自分たちが持っている知識では、子どもに助言することや活動に対しての時間の見通しがもてないことを理解していた。さらに調理実習

につながる、安全に調理をさせるための手立てを十分に行うことができなかったことを認識した。これらのことから、調理場面を通して学生は、自分ができることと指導することの違いにも気づくことができ、指導するための知識・技能の必要性について考えるきっかけになったといえる。

2点目は、子どもの活動を補助することを通して、子ども達の実態の一部を理解することができたといえる。調理の技能だけでなく、整理整頓についての子どもの実態を垣間見ることができた。整理整頓は、学校でも様子をうかがうことができるが、通学合宿のような集団生活を行う場面で、助言をしたことがどのような成果になるかについて経験したことが印象に残っていることが学生の反省からも読み取れた。

3点目は近隣の人々とのかかわりについて気づくことができたことである。近隣の人々とのかかわりについて考えることも、家庭科の学習内容であるが、買い物や買い物を行う際の失敗体験を通じて、子どもだけでなく学生も近隣の人々に支えられていることに気づくことができたといえる。

今回の通学合宿では、洗濯を行わなかったために、衣服に関する学びは無かった。また金銭の使い方についても、予算内で買い物をするということが活動の目的になっており、計画的に使う、使い終わった後のことも考慮するなどの項目についての気づきは無かった。したがって、通学合宿で補助学生が気づいたことは、家庭科で教える内容の一部であった。しかし自分たちの知識や技能が十分でないことに気づけたことは、学生にとって大きな学びであったといえる。さらに学生の反省では、生活指導面での反省も多く見られた。これは教員を志望しており、教育実習をまだ体験していない学生にとって学びが多かったからであると推測される。

## 付記

本研究は、平成26年度科学研究費補助金若手研究B(課題番号26870016)による支援を受けている。

## 参考文献・引用文献

- 1) 文部科学省「平成23年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査(A票)の結果について」([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/news/\\_icsFiles/afeldfile/2012/01/31/1315677\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/news/_icsFiles/afeldfile/2012/01/31/1315677_1_1.pdf)) 2014.8.25閲覧

- 2) ベネッセ教育研究所「第1回子ども生活実態基本調査報告書」2004年  
国立教育政策研究所社会教育実践研究センター「地域における通学合宿活動の実態に関する調査研究平成13年度社会教育実態調査」, 平成14年
  - 4) 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター「地域における通学合宿活動の実態に関する調査研究平成18年度社会教育実態調査」, 平成19年4月
  - 5) 正平辰男・永田誠・相戸晴子著「子どもの育ちと生活体験の輝き これまでの通学合宿これからの通学合宿」あいり出版, 2010年
  - 6) 南里悦史著「改訂 子どもの生活体験と学・社連携」光生館, 2001
  - 7) 正平辰男著「通学合宿・生活体験の勧め お分かりですか? 「子どもはやったことのないことは、できない」ということを」あいり出版, 2005年
  - 8) 文部科学省「小学校学習指導要領解説家庭科編」東洋館出版会, 平成20年
- (2015. 8. 3 受理)